いま、女性たちは

幼い頃の私は、活発で明るい子ではありましたが、特にスポーツが得意なわけでも、勉強が得意なわけでもありませんでした。自分に自信を持つことができず、自信を持つための何かをずっと探していました。そんな時に相談相手になってくれた、体育の先生の言葉をきっかけに「私のなかにも、自分にしかないものが必ずある。何事にも一生懸命取り組もう」という気持ちが生まれました。そして、誰もやりたがらなかった中学校での800m走でいい結果をだすことができ、走ることに対して明確に自信を持つようになりました。そこから私の陸上選手としての人生が始まりました。

国連人口基金親善大使
有森　裕子

その後、私は女子マラソンで2回オリンピックに出場しましたが、オリンピックにおいてこの種目ができたのは1984年のロサンゼルス大会からです。それまでは、マラソンは女性には体力的に過酷だという判断で開催されていませんでした。しかし、かつては男性しか出場できなかったボストンマラソンという歴史的な大会に、どうしても参加したいという女性が偽名を使って出場しました。運営側がレース途中でそれに気づき、彼女を退場させようとしましたが、参加していた男性ランナーの助けもあって完走することができました。これをきっかけに女性の参加が認められるようになり、オリンピックでの女子マラソン開催につながりました。無理に同じにする必要はありませんが、今では男女間の種目の差もなくなってきています。女性スポーツの歴史はまだ浅いですが、その世界はこれからも広がっていくと思います。

競技において多くの女性選手が活躍する一方で、運営組織などにおいては、まだまだ女性の参加が少ないように思います。しかし、男性と女性は生物学的にも異なっており、何にそれぞれの持つ特性が生かせるのかも違います。違うからこそ、お互いが存在する意味があります。ただ、その違いを差別にしてはいけないだけです。スポーツの世界に限ったことではありませんが、参加したいと思っているのに、女性というだけでその機会が与えられないことは問題です。しかし、時代が変わっていく中で、男女の扱いの差を埋める段階の一時的なものである場合は別として、女性自身が、女性としての特別扱いを喜ぶことには違和感を覚えます。女性であるということに固執して物事を考えていくのではなく、1人の人間としてその能力が正しく評価されるよう努力すべきだと思います。

長い間日本では、スポーツは純粋なもので、お金が絡むべきではないというような考え方がありました。そのような状況の中、私は日本初のプロランナーとして活動を始めました。批判もありましたが、世界にスポーツを生きる手段としている人が増えている中で、日本も変わらざるを得なくなる、変えることができると信じていました。後に続く人たちのためにもという思いもありました。そして今では、当たり前にプロ活動ができるようになりました。スポーツの世界でなくても、まだまだ日本ではお金を稼ぐのは男性で、女性はお金と結びつかないことが崇高であるかのような風潮もあります。しかし、ビジネスは自分の能力に対する対価で、その形をとれないことで能力を発揮できないこともあります。無償奉仕には限りがあり、甘えもでます。世の中のシステム以前に、その意識を変えることが必要だと思います。

私は、自分自身も含めたアスリートたちのマネージメント支援のために、ライツという会社を設立しました。アスリートは単に競技性だけを追求するのではなく、競技に対して必死になってがんばっている中で学んだり、経験したりしたことを自分の生き方のメッセージとして伝える意識をもつことが必要だと思います。そして、その人たちを支える存在をもっと作っていかなければとも思います。アスリートとしての競技人生は決して長くはありませんが、その短い期間に人一倍いろいろな経験をしています。それを単なる記録や経験で終わらせてしまうのではなく、その経験を生かしたその後の生き方を考えるべきだと周りも思うし、本人も思うべきだと感じます。その環境づくりを一緒にしようというのがライツです。具体的にどのようなつながりを持てばいいのか、どのようにメッセージを伝えればいいのか、という疑問を持つ人たちのきっかけづくりを支援しています。それは私自身がしてもらってきたことに対する恩返しでもあります。

アトランタオリンピックの後、カンボジアで行われた義手・義足を必要とする人たちへの支援のためのチャリティレースに誘われ、初めて途上国を訪れました。そこで貧困に苦しむ悲惨な現場と、そのような状況の中でも生き抜いていく生命力にあふれた強さを目の当たりにし、その両面に強い衝撃を受けました。翌年2回目に参加した時には、いい意味で、1回目とのあきらかな違いを感じました。大会には、義足の人たちも子どもも参加できます。この国には、対人地雷で傷ついた多くの人たちがいますが、被害に対して国の援助が受けられない上に、そのような目に遭うのは、自身の前世に原因があるという考え方が根強く残り、世間で虐げられているような状況でした。この大会は、そのような人たちが、がんばっている姿を見せることができる場でもあります。子どもたちにとっても、この大会を励みに練習を行い、生きる力となっていました。たった1つのスポーツ大会で皆がこんなに元気になるのならば、もっと自発的に取り組んでいこうと考えて「ハート・オブ・ゴールド」というNPO法人を立ち上げました。以来、自立支援という分野で活動しています。その中でも特に形になったのが、現地で5年間やってきたスポーツ指導者育成プログラムの実績が認められ、カンボジア政府からの依頼で、小学生対象の保健体育の指導要領の作成を手伝ったことです。それまでカンボジアには、体づくりに1番大事な時期にある小学生向けの保健体育についての指導要領がなく、自分自身の体や病気のことについて学ぶ機会がありませんでした。2007年にその指導要領は完成し、2008年にはさらに指導書となる予定です。指導書が完成すれば、モデル校に指定された小学校に配布され、実際に先生がそれを使って教育を行うことになります。

選手にならなくても、スポーツをすることで子どもたちはつながり、元気になります。また、その時がんばったという経験が人生を変えるきっかけにもなります。スポーツを教えることは、その技術以前に、人間が人間力を持って生きていくことを教えるのに1番いい手段だと思います。人とコミュニケーションをとること、健康であること、ルールを守ること、あきらめずにがんばること。生きていくために身につけなければいけないそれらの大切さを、楽しい競技の中で学ぶことができます。人を作る、育てるという面におけるスポーツの重要性や可能性を、もっと伝えていきたいと思います。

私はアトランタオリンピックでゴールした時、「自分で自分をほめたい」と言いました。それは自分が努力してきた過程を、自分自身が1番わかっていたからです。これからも、自分がやれるだけがんばったと納得して生きていきたいと思います。世界にはさまざまな境遇の人たちがいますが、それぞれにチャンスを持っています。男性だから、女性だからというよりも、1人のチャンスを持っている人間として、いろんなことに全力で向かっていって欲しいと思います。誰かや、何かに変えてもらおうと待つのではなく、自分から何かを変えていこうという姿勢が大事だと、私は信じています。

国連人口基金（United Nations Population Fund）

世界の人口問題の改善と解決をめざす国連の開発機関。設立当初の名称「国連人口活動基金」（United Nations Fund for Population Activities）の略称から、UNFPAと呼ばれている。特に開発途上国の人口問題に対し、各国政府やNGOとともに取り組んでいる。また、人口問題のなかでも、リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）、リプロダクティブ・ライツ（自らのリプロダクティブ・ヘルスを守る権利）、女性のエンパワーメントに重きをおいた活動を行っている。

参照　国連人口基金東京事務所　http://www.unfpa.or.jp

有森　裕子　Yuko Arimori
元プロマラソン選手。バルセロナオリンピック（1992年）で銀メダル、アトランタオリンピック（1996年）で銅メダルを獲得。現在は、（株）ライツ取締役、NPO法人「ハート・オブ・ゴールド」代表、国連人口基金（UNFPA）親善大使、国際陸上競技連盟（IAAF）女性委員会委員なども務めている。

※本稿は、2008年1月17日に行った有森裕子氏へのインタビューをもとにしたものです。